OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学齢期の子どもたちのためのプラントン
Author(s)	マシューズ, ギャレス; 寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学. 2005, 6, p. 79-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《特集：子どもの（ための）哲学》

学齢期の子どもたちのためのプラトン

ギャレス・マシューズ (Gareth Matthews)
寺田　俊郎　訳

プラトンは、哲学的な観念や議論を生き生きしたものにする特別な才能をもっていた。その特別な才能のおかげで、プラトンのテキストの多くの章句が、おとなたちだけでなく、子どもたちの哲学的な議論を触発するのに、この上なく適している。私はプラトンのテキストを、わずか7、8歳の子どもたちと一緒に使ってきた。私のお気に入りは、プラトンの『国家』にあるギュゲスの指輪の話だ。思考実験によって考察中のテーゼが吟味される。思考実験によってテーゼが論駁されることもある。たとえば、プラトンの『国家』のソクラテスは、有名な思考実験を使って〈正義とは真実を語り借金を返すことだ〉というテーゼを論駁しようとする。ソクラテスは、あなたが武器を借りた人の気が狂ってしまった場合、その人に武器を返すことが正しいことかどうか尋ねる。それは正しくない、ということに誰もが同意するだろう。こうして〈正義とはたんに真実を語り借金を払うことだ〉というテーゼは論駁される。

しかし、テーゼを論駁するためではなく、擁護するために思考実験が提供されることもある。ギュゲスの指輪の話がそうである。この話は『国家』の第二巻に登場するのだが、それは、我われが道徳に拘束されるのは、そうすればさらに都合の悪いことから身を守ることができると考えるからにすぎない、ということを我われに認めさせるために、ソクラテスの対話相手であるグラウコンが持ち出すものである。その思考実験はこうだ。

> ギュゲスは、羊飼いとして当時リュディア王に仕えていたが、ある日のこと、大雨が降り、地震が起こって、大地が裂け、羊たちに草を食わせていたあたりにぽっかりと穴が開いた。これを見て彼は驚き、穴の中に入っていった。そしてそこに、いろいろと不思議なものを見た。なかでも目についたのは青銅製の馬であって、これは、なかが空洞になっていて、小さな窓がついていた。彼は身をかがめてその窓からのぞきこんでみると、なかには、等身大以上の死体らしきものがある。それは、何も身に着けていなかったが、ただ指に黄金の指輪をはめていたので、彼はそれを抜き取って、穴の外に出た。
>
> さて、毎月羊たちの様子を王に報告するために行われる羊飼いたちの恒例の集まりがあったときのこと、そこにギュゲスも、例の指輪をはめて出席した。そうして、ほかの羊飼いたちと一緒に坐っていたとき、ふと何気なしに、指輪の玉受けを自分のほうに、

手の内側に、回してみた。するとたちまち自分の姿が、かたわらに坐っていた人たちの目に見えなくなってしまい、彼らは、ギュゲスがどこかへ行ってしまったなどと、自分のことを話しあっているではないか！　彼はびっくりして、もう一度手さぐりで指輪にさわり、その玉受けを外側に回してみた。すると、彼の姿が見えるようになった。

このことに気づいた彼は、その指輪に本当にそういう力があるのかどうかためしてみたが、結果は同じこと、玉受けを回して、内側に向けると、姿が見えなくなり、外側に向けると、見えるようになる。これを知ってギュゲスは、さっそく、王のもとへ報告に行く使者の一人に自分が加わるように取り計らい、そこに赴いて、まず王の妃と通じたのち、妃と共謀して王を襲い、殺して、王国をのっとった。

それから、ソクラテスに挑むグラウコンは、さらに次のように述べる。

ところで、かりにこういう指輪が二つあって、その一つを道徳的によい人が、他の一つを道徳的に悪い人が、はめてみたとしましょう。それでもなお、道徳の道にとどまって、あくまで他人のものに手をつけずに控えているほどよき人など、一人もいまいと思われましょう。何でも好きなものを何も恐れることもなくとってこられるし、誰にも知られず家々に入り込み、その他何ごとにつけても、人間たちのなかで、神様みたいに振舞えるというのに！　むしろ以前のよき人の振る舞いが今やギュゲスの指輪を与えられて道徳的に悪い人の振る舞いと何ら異なるところがなく、どちらもまったく同じところへ赴くでしょう。このことは、何人も本当は道徳的によい人でありたいなどとは思わず、道徳的によいことを行う人々も、ただ他の人々にほめられ、何か悪いことをしてつかまることを恐れるから、そのように振舞うにすぎないのだということの、動かぬ証拠です。
（『国家』第二巻、359c-360c, 藤澤令夫ほか訳、やや改変）

何年か前、私は、ミネソタ州のセント・ポール市で、5年生を対象にデモ授業を行うよう頼まれた。実を言うと、授業という形で子どもとともに哲学するのは、あまり好きではない――とりわけ相手の子どもたちと、それまで哲学する機会がなかった場合には。デモ授業を行うことになっていたセント・ポールの講堂に入ると、子どもたちの椅子がおとなの聴衆に面して半円形に並べられていた。私は、直ちに、子どもの椅子を黒板のほうに向け変えてください、そうすれば、うまくいけば、おとなの顔がじろじろ見ているのを、子どもたちはあまり気にしなくてもすむかもしれませんから、とお願いした。

ふたを開けてみると、その5年生の子どもたちは、まったくおどおどすることがなく、目を見張るほどはっきりと発言した。私の心配は杞憂だった。子どもたちは、ギュゲスの指輪の話にすぐに入り込み、自分の考察したことを、言葉を交わせる範囲にいる誰とでもためらうことなく分かち合った。

その子どもたちに、もしギュゲスの指輪をもっていたらどうする、と尋ねた。ほとんどの

子どもたちは、その魔法の指輪をもっていたら今よりたくさん悪いことをするだろう、と進んで認めるようだった。だが、一人の女の子――「ローラ」と呼ぼう――は自分独自の特別な考察を付け加えた。

「もちろん、たいていの人は悪いことをするでしょう。指輪がなかったらとてもしそうもないことをね」とローラは認めた。「でも、指輪がなかったらできないようなよいことをする人もいると思うわ。」

私はローラにどんなことを念頭においているのか尋ねた。

「たとえば、私がしてあげたってことをぜったい知ることができない人に、すてきなことをしてあげるのは楽しいでしょうね。」

ローラの論点は、私がこれまでプラトンのギュゲスの指輪のお話しについて考察した際に、一度も思いつかなかったものであることを、認めなければならない。実は、ローラの論点の意義を十分に理解するには少し時間がかかった。プラトンは、『国家』において、その時のソクラテスの対話相手であったグラウコンに仕掛けさせて、我われが「率直に話し」、ギュゲスの指輪があれば、みなとんでもないことをするだろうと認めるよう、道徳的な圧力をかけたのである。だが、人は誰も、ただ利己的な欲求を動機として行動するにすぎない、という想定は疑問に付される必要がある。ローラはそれを疑問に付し、退けたのだ。

ローラが退けたもの、そしてそれを退けることの意義を考察することには価値がある。我われが行うことはすべて利己的な動機に基づいているという想定を、「心理学的エゴイズム」と呼ぶことにしよう。心理学的エゴイズムを、一種のよくあるシニシズムに動かされて受容する気になる人もあるかもしれない。きわめて利他的に見える行為ですら、実際は利己的な動機によって行われるのである、と主張する人もいるかもしれない。私が、船から落ちた子どもを助けようと、命を賭して怒涛の海に飛び込むとしよう。心理学的エゴイズムを主張する人は、私は有名になりたいのだとか、少なくとも他人によく思われたいのだとか、主張するかもしれない。それが偽であることを示すのは難しいかもしれない。しかし、ローラが言い出したことをもとに再考すれば、別の結論が期待できるかもしれないのだ。

ローラが示唆したのは、ギュゲスの指輪をはめていたとすれば、実は純粋に親切な行為を自由に行える場合がある、ということである。彼女がさらに付け加えたのは、そのような機会を折りあるごとに生かすために、人はことさら善人である必要はない、ということである。

たしかに、匿名で贈り物をする人々のなかには、最後には贈り主が誰であったのかに気づいてほしい、そして事実それが誰であったかわかったときには、匿名で贈り物をしたことで特別な利他心のもち主だと認めてほしいと思う人もある。しかし、場合によっては人は匿名で贈り物をし、自分がその善行を施した人であることを悟られたくない、と心から思うこともあるのだ。ギュゲスの指輪をはめていたとすれば、匿名的な盗人になる機会が確保されるだけでなく、匿名的な贈り主になる特別な機会も確保されるのである。

ローラは、まったく思わせぶりなところなく自分の意見を述べた。しかし、その意味するところはなかなか奥が深い。それは、人間の動機の込み入った諸側面について、もう少し明

晰に考える助けになる。それ以前にギュゲスの指輪について大学生と行った数多くの議論で、そのような意見を聞いた記憶はない。

そのミネソタの５年生の授業の思い出のなかで際立つ、もう一つの線の考えがある。それは、男の子の一人が口火を切ったものだ。その子を「アンドリュー」と呼ぶことにしよう。

ギュゲスの指輪を持っていたら悪いことをもっとするか、という問いにアンドリューは次のように応じた。「うーん、それは指輪の効果が、実際はどのようなものかによるな。」私は、アンドリューが具体的に何を念頭においているのか尋ねた。

アンドリューは続けた。「えーと、杖を使っていたとすると、杖も見えなくなるのかな。それとも杖だけが歩いて部屋から出て行くのが見えるのかな。」

この示唆にはみんな笑った、参観の人々もクラスの子どもたちも。だが、アンドリューは続けた。

「じゃあ服は？　服も見えなくなるの？」と彼は尋ねた。我われはみな服も見えなくなると思い込んでおり、服も見えなくなるのかどうか問うことを思いつかなかったことに気づいた。だが、それはなぜだろう？　それからアンドリューはもっと面白い論点に行き着いた。

「そして、たとえば、盗もうとしているテレビはどう？　指輪をはめている人が運ぶだけでテレビも見えなくなるのかな、それともテレビが宙に浮いて部屋を横切り、ドアから出て行くのかな？」 宙に浮いたテレビが、盗みが進行中であることをみんなに告げることは明らかである。

アンドリューの二つの問いも、想像力に満ち独創的である。私がそれまで参加したギュゲスの指輪にかんする数多くの議論のなかで、その問いを立てた人はいなかった。（もっとも、ドイツのハンブルグでその数年後に授業をした２，３年生のグループの一人の子どもから、同じような問いをもらった。）

宙に浮いたテレビをめぐるアンドリューの問いは、なかなか奥が深いと思う。ソクラテスの対話相手がギュゲスの指輪にどんなに大きな力を与えようと、その指輪をはめているだけで悪事の成功が保障されるかどうかは、つねに疑問である。ここで、指輪が見えなくするものは厳密に言って何か、という問いが決定的に重要になる。指輪をはめている人が触ったものがすべて見えなくなるなら、盗人ははだしで行かないほうがよい、さもなければ彼の足元の地面も見えなくなって、彼はこけたり石に躓いたり穴に落ちたりするだろう。そして指輪のおかげで気づかれずにテレビを家に持って帰ることがなんとか可能であるとしても、テレビは家では再び見えるようにならなければならない、さもなければそれを盗んだことには価値がなくなる。誰かがそれを見て、それがもともとどこにあったものか気づくかもしれない。

もっと一般的に言えば、アンドリューの問いは、悪事をはたらく人が、悪事を行いしかもその悪事の成果を享受することができるのはいかにしてか、にかかわる。ギュゲスの指輪を手に入れてからの人生を詳細に想像し始めると、指輪をはめていればギュゲスは無傷であるという前提は怪しくなる。プラトンの思考実験それ自体がさらに怪しくなる。もっとも、こうして我われがその怪しさを理解し、議論することをプラトンは喜んだであろう。

セント・ポールの５年生たちとの議論は、私が参加したギュゲスの指輪をめぐる考察のなかで最も実りあるものだった、と私は思う。だが、もちろん、特に他の子どもたちとの議論も含めて、この物語にかんするすぐれた議論には、他にもめぐりあったことがある。たとえば、数年前オーストラリアはタスマニアのホーバートで、10 歳と 11 歳の子どもたちのグループとすぐれた議論をした。

ホーバートのグループは、ふたを開けてみると、かなりの人数だった。参加を促すために、一人一人意見や疑問を出してもらって、黒板に書き留めることから議論を始めよう、と子どもたちに言った[1]。ほとんどの子どもたちから発言を聞いてからその意見について議論しよう、と。

たくさんの面白い意見や疑問があげられたが、もちろんそれほど有望ではないものもいくつかあった。ここに記すのは面白い意見や疑問のいくつかである。

（１）学校で道徳的にいいことをすると自分のことを気持ちよく感じます。（ヴェロニカ）

（２）この物語が教えるのは、機会がありさえすればぼくたちはその機会を利用して悪いことをするということです。（チャールズ）

（３）道徳的によい人と悪い人には違いがあります。（ニカ）

（４）道徳的によい人々は、悪い人になるという結果がいやだからよい人なのです。道徳的に悪い人はそんなことを気にかけません。（ジョー）

（５）ギュゲスがひとたび王国を手に入れたら、あとはどうなるのだろう？（ブロック）

（６）ギュゲスが王国をのっとったのは、たぶん羊の番をするのに飽きたからだろう。（サム）

（７）ギュゲスは指輪を見つけたときはよい人だったのだろうか？（ミランダ）

これらの問いはどれも反省を加えるだけの価値があるが、さしあたり（５）と（７）に絞りたい。まず（５）「ギュゲスがひとたび王国を手に入れたら、あとはどうなるのだろう？」を考えよう。

我われの文化に属する伝統的なお話しでは、王と女王が王国の他の誰よりもはるかに大きな力と富をもっている。それは王や女王が幸福をも独占しているということだろうか？　問い（5）によってブロックが示唆しているのは､不正な手段で力と富とを手に入れた後で､ギュゲスが、自分にふさわしくないその地位に不安や不満を感じてもおかしくない、ということである。このことは、王の臣下たちが、前王の運命やギュゲスが力を握った経緯を知り、反発や憤りを感じるならば、特にありそうなことである。ギュゲスの姿を見えなくするという指輪の魔力によって、王を殺し王座を手に入れることはできるかもしれない。だが、姿を消したいときにいつでも消せるということは、王の職能を果たすという課題にはかかわりのないことである。ギュゲスは、すぐに一時的な満足しか与えない逃げ道に走るのではないか、と考える人もあろう。それがブロックの意見のポイントだったように思われる。

さて、ミランダの問いを考えてみよう。「ギュゲスは指輪を見つけたときはよい人だったのだろうか？」ミランダの問いもまたとても奥が深いと思う。さて、この問いを奥の深いものにしている何かを、掬い上げることができるだろうか。

ギュゲスの指輪の意図するところは、悪事を行ったときに見つかってそれ相応に罰せられるということから離れて、道徳の強制力はない、ということを我われに認めさせることである。ミネソタのローラは、その指輪をはめていれば、悪いことだけでなく、その他の場合にはしなかったであろうようなよいことをも実際自由に行えるようになる、と言うことによって、そのような考えの力を削いだのである。ホーバートのミランダは、指輪を見つける前のギュゲスの性格の道徳的評価を問うた。プラトンが設定した話し手のグラウコンは、ミランダに対して何と答えるだろうか。ギュゲスがよい人だったと言うとすれば、グラウコンは自分のお話しのもっともらしさを覆すことになる。よい羊飼いだったとすれば、指輪を見つけるやいなやギュゲスがしたようなひどいことをしないであろうことは、言うまでもない。ギュゲスはずっと悪い人だったと言うとすれば、このお話しは的外れになる。悪い人々がやりおおせることは何でもしようとすることは、あらためて言うまでもないことである。ギュゲスはよい人でも悪い人でもない、というとすれば、またしても、よくも悪くもない人が、その指輪を所持していれば、ギュゲスが行ったような悪事の数々を行うだろうというのはもっともらしくない。

プラトンの『国家』の登場人物であるグラウコンが主張したいことは、道徳とはたんに慣習の問題だということである。グラウコンは、人々自身は善でも悪でもない、と思っているに違いない。だが、このお話しをもっともらしいものにするために、すべての人は心理学的なエゴイストであって、善や悪といった道徳的性格を一切もたない、と想定しなければならないとすれば、グラウコンの思考実験をもっともらしいものにするためには、グラウコンの結論が真であると想定しなければならいように思われる。しかし、その思考実験はグラウコンの結論はもっともらしいものにする直観を呼び覚ますことになっていた。すると、この思考実験がもっともらしいと思うならば、その思考実験によってもっともらしくなるはずの結論を、すでに受け入れていることになる。すると、それは論点先取である。これがミランダの尋ねたことにひそむ奥の深い意味である。

ミネソタのセント・ポールやタスマニアのホーバートの学齢期の子どもたちたちと行ったプラトンのギュゲスの指輪をめぐる議論から、どんな結論を導き出すべきだろうか。私自身としては、ミネソタとオーストラリアの学齢期の子どもたちたちと議論したことから、ギュゲスの指輪という思考実験の限界をよりよく理解できるようになった、と言わねばならない。この評価には、この一節をめぐって大学生たちと行った議論をけなす意図はない。このような哲学的に面白いお話しを学齢期の子どもたちと議論することに備わる特別な効能を、強調したいだけである。子どもたちは哲学的な問題に、おとなには、いや大学生にすら、応えるのが難しいほどの新鮮な気持ちで取り組む。だが、私が強調したい第一の論点は、学齢期の子どもたちたちは、哲学的なテキストを使って実際に哲学を、ほんものの哲学をすることができることは確かだ、ということである。それがほんものの哲学であることの証明は、私のような経験を積んだ、テキストに親しんできた哲学者が、学齢期の子どもたちたちとのすばらしい議論から哲学的に重要なことを学んだと思うこと、である。

＊＊＊

さて、小学校の教室でプラトンを使った他の事例に移ろう。プラトンの『国家』の第四巻に、人間の魂ないしは自己の部分に関する有名な議論がある。プラトンは、人間の徳とは何かを明確に言うためには、自己がいくつかの違った部分をもつことを確証する必要がある、と考える。プラトンの想定によれば、「ポリス」（都市国家）は個人を大きくしたものであるから、人間の個人について言いうることは、都市あるいは国家について言うべきことと平行関係にある。プラトンの考えによれば、「ポリス」には三つの部分－支配階級、武人階級、労働者階級－があるのだが、それとちょうど同じように、個人の魂ないしは自己には三つの部分－理性、精神、欲求－があるとプラトンは考える。さらに、忍耐や知恵や勇気などの徳が何であるかを言うことは、これらの部分がそれぞれの仕事を立派に果たすとはどういうことかを言うことを含む、とプラトンは考える。

その後、哲学者も心理学者も、自己を分析する際に、プラトンにそっくりそのまま従うことはなかったが、多くの哲学者や心理学者が、特に悪名高いフロイトも含めて、何らかの分割をしたのであった。事実、フロイトは、三つの部分に異なる記述を与えたが、自己が三つの部分をもつと主張した点ではプラトンに従ったのである。たとえば、意識的な自己と無意識的な自己、あるいは理性的な自己と非理性的な自己という、ただ二つの部分があると主張した思想家もいた。こういった事柄をあまり考えたことのない人々ですら、「私の一部がそれをしたいと思っているが、他の一部はしたくないと思っている」などと言いたくなるのである。このようなふつうの話し方もまた、自己を部分に分割して考えるよう我われを誘うのである。

ここにあげるのは、すばらしく込み入ったプラトンの『国家』の一節が最高潮に達するところであって、そこでは分割された自己という考えを擁護する議論がはじめて登場する。そこでポイントとなるのは、各々の人間の魂ないし自己は少なくとも二つの区別されるべき部分をもつことを、確証しようとすることである。（ソクラテスが話しのほとんどをしている。）

「ところで、人がのどは渇いているけれども、飲むことを望まないという場合もときにはあると、我われは言うべきだろうか？」

「ええ、それはもう」と彼は答えた、「たくさんの人たちが何度もそういう経験をするというべきでしょう」

「すると、そういう人たちについてどのようなことが言えるだろうか」とぼくは言った、「その人たちの魂のなかには、飲むことを命じるものがあるとともに、他方では、それを禁止するもう一つ別のものがあって、飲むことを命じるものを制圧しているというべきではないだろうか？」

「たしかにそう思います」と彼は答えた。

「そして、そのような行為を禁止する要因が発動する場合には、それは理を知る働きから生じてくるのであり、他方、そのほうへ駆り立て引きずっていく諸要因は、さまざまの

身体条件や病状を通じて生じてくるのではないだろうか？」

「そう思われます」

「そうすると」とぼくは言った、「我われがこう主張するのは、けっしていわれのないことではないというべきだろう――すなわち、それらは互いに異なった二つの別の要素であって、一方の、魂がそれによって理を知るところのものは、魂のなかの〈理知的部分〉と呼ばれるべきであり、他方、魂がそれによって恋し、飢え、渇き、その他もろもろの欲望を感じて興奮するところのものは、魂のなかの〈非理知的部分〉であり、さまざまの充足と快楽の親しい仲間であると呼ばれるのがふさわしい、と」（『国家』第四巻ｃｄ藤澤令夫訳）。

私はプラトンのこの一節を、子どもとともにする哲学的議論を始めるためのお話しの発想の源として使った。ここにあげるのは私が考え出したものである。

自分自身の部分

アンナ：「お父さん、お父さんにはいろんな部分があると思う？」

父：「うん、もちろんだよ、アンナ。お父さんには二本の足と、二本の腕と、胴体と頭がある。それは全部お父さんの部分だよ。」アンナのお父さんは、アメフトの試合を見るために、テレビの前の安楽いすに腰を下ろそうとしていたところでした。

アンナ：「ちがうの、私が言いたいのはそういうことではなくて、たとえば、今日のお昼、感謝祭のご馳走を食べたでしょ。もうたくさん食べすぎて、吐きそうなほどだったの。でもお母さんがデザートにアイスクリームに添えるブラウニーを作って、感謝祭でもあることだし好きなだけブラウニーを食べてもいいと言われたの。だから二つ食べたわ。それからね、言ってみれば私の一部はもう一つブラウニーが欲しかったけど、私の一部はもうやめといたほうがいい、気分が悪くなっちゃうよ、て言ったの。お父さん、そういう風に、もっともっとブラウニーを食べたい部分と、もうやめといたほうがいいと言うおりこうさんの部分と、違った部分が本当にあると思う？」

父：「うん、そう言っていいんじゃないか。いつももっとブラウニーを食べたいくいしんぼうのお前の部分と、やめたほうがいいときに知らせてくれる理性的なお前の部分がある、と言っていいと思うよ。」

アンナ：「友だちのトニーはそう言うのよ。トニーはね、人にはいくつか違った部分があって、一つの部分があることをしたいと思えば、他の部分がそれとは違ったことをしたいと思うんだって。昨日、学校のカフェテリアでお昼ご飯のときに、それを話し合っていたんだ。そういうことを言うのは、ほら、一つの話し方にすぎない、て私は言ったの。私たちは本当はそういう風に部分をもっているのではないって。私たちはいくつかの違った願い、そう、欲求をもっているだけ。そして、自分の欲求を全部満たすことは

できない、て気づくことがあるの。たとえば、ブラウニーをもっともっと食べたいという欲求を満たし、気分が悪くなりたくないという欲求も満たすことはできない。もう一つブラウニーを食べたいという欲求と気分が悪くなりたくないという欲求がけんかするの。」

父：「それはもっともだ思うよ。」

アンナ：「でも聞いて！　トニーは、欲求というのは、池の落ち葉のようにただ心の中を漂っているだけではないんだ、て言うの。何かを欲しいと思うのがその人自身でなければ、その人は欲求をもったことにならない、て。もう一つブラウニーが欲しい人と食べるのをやめたい、気分が悪くなりたくない人は両方同時には成り立たない、て。」

父：「なぜ？」

アンナ：「それは人がじっと座ってもいれば動いてもいるというようなものだ、とトニーは言うの。人の部分、たとえば手が動いていて、他の部分がじっと座っていることはできる。でも、その人全体が両方を同時にすることはできない。お父さん、それに対して私が何て言ったか知りたい？」

父：「もちろんだよ、教えてくれ、アンナ。」

アンナ：「私が言ったのはこういうことよ。それを考えたことはほんとに自慢できるわ。ある人がスクールバスに乗っているとき、その人全体がいすにじっと座っていても、スクールバスは動いているからその人全体が動いていると言うことができる、て言ったの。」

父：「うまいなぁ。脱帽だよ。」

アンナ：「でもね、トニーはそれにも答えたの。とても頭がいいわ。ある人全体が、ある一つのものに対して動いていると同時にじっと止まっていることはできない、て。たとえば、人全体が地面に対して動いていると同時にじっと止まっていることはできない。同じように、目の前の皿にのっているブラウニーに対して、それが欲しくないと同時に欲しいと思うことはできない。でも、その人の部分がそれを欲しいと思い、他の部分がそれを欲しくないということはできる。お父さん、トニーの言うことは正しいと思う？」

父：「アンナ、わからないよ。それに、今はアメフトの試合が見たいんだ。」

アンナ：「お父さん､助けてくれたらいいのに…｡自分で解決しなくちゃしかたなさそうね。私には、ほんとうにそういう風に、いくつかの違った部分があるのかしら。それが知りたいの。」

私は、このお話しを、マサチューセッツ州のノースハンプトンにある小学校の二つの別々のクラスで５年生たちと議論した。

どちらのクラスも、身体の運動と欲求とのアナロジーに焦点を当てることから議論を始めた。トニーは、お話の中で、じっと座っていると同時に動いていることはできない、と言った。しかし、トニーは、人の部分、たとえば手が動いており体の他の部分がじっとしていること

はできる、と付け加えた。

アンナは、人は動いているスクールバスの中でじっと座っていることができることを指摘した。そうすると、ある人全体がじっとしており、同時にまたその人全体が動いていることがあることになる。だが、じっとしていることと動いていることとが、違ったものに対してであることもあろう。たとえば、ある人全体が座席に対してはじっとしているが、地面に対しては動いていることがありうる。

一人の子どもがすぐに「〜に対して（with respect to −）」とはどういう意味か知りたいと言った。私がバスに乗っていることにして、座席に対してはじっとしているが地面に対しては動いているという考えを演技的に示そうとした。私はかなりばかみたいに見えたに違いない。子どもたちはおかしそうだった。が、子どもたちはその観念を理解したと思う。

その子どもたちがまず興味をもったのは、誰かの身体がどういうわけか動いていると同時にじっとしたままである、という考えであるようだった。子どもたちは、身体が完全に静止状態にあることは果たしてありうるか、について考え始めた。「じっと座っているがなお心臓が動いていることがある」とジェイソンが言った。「人体が何もしないということはない」とエスターが宣言した。「息をしていることですら、何かをしているということだ」とカールが言葉をはさんだ。

プラトンは対話篇『国家』の、私が先に引用した箇所の直前の一節で、動いているバスの中に座っていることという私の例よりもきれいなアナロジーを選んでいる。プラトンは完璧に回転している独楽という考えを使った。実を言うと、私の子どもたちが回していた独楽は、私が思い出せる限り、すべて不恰好にぐらついたり、たとえ数秒の間完璧に直立を保ったとしても、床の上を立ったままあちこちした。もちろん、プラトンが描くような独楽、つまりその場で静止して完璧に回転しているため魔法のようにじっと立っているように見える独楽を、想像することはできる。そのような場合、プラトンとともに、独楽は動いていると同時に静止している、と言うこともできるだろう。その場合、独楽の表面に対しては動いているが、それは完璧にその場で回転しているのだから軸に対しては静止していると言うことができる。

お話しをつくるにあたり、プラトンの独楽よりも簡単なアナロジーを選んでやろうと思っていた。だが、子どもたちは私の考えの足りなさをあばいた。スクールバスの座席に対して完璧にじっと座っていたとしても、たとえば心臓などのように、いや、ある子どもが指摘したように瞬きする目ですら、動く部分がある。その子の指摘するとおり、生きている限り、我われは完璧にじっとしていることなどない。私は同意せざるをえなかった。

では、そのお話しの中心的な考え——各々の自己は少なくとも二つの違った部分をもつというプラトンの考え——はどうか。ただちにその考えはもっともらしい、いや自然であるとすら思った子どもたちも何人かいたようだ。促されてもいないのに、アレックスはまったくプラトン風に、自己の部分が理性と欲求であると見なした。しかし、アレックスは、他の人に教えてもらったことを受け売りしているだけだとは思われなかった。なぜなら、アレックスは理性と欲求に相当する自分自身の用語を編み出したように思われるからである。「賢い

部分と欲しがる部分があるんだ、欲しがる部分は何かを欲しいと思い、賢い部分が『だめ』と言うんだよ」と、言葉を注意深く選びながらアレックスは言った。アレックスが理性と欲求との間に設けた対照は、西洋哲学の歴史を通じて見られるものである。しかし、アレックスはそれを一から創り出したように思われる。

良心という観念に言及した子どもたちも何人かいた。だが、その子たちは良心のことをどう考えればいいのか、確信をもっているわけではなかった。それは内的な行為主体なのだろうか。検閲官のようなものだろうか、それともただ「心の中の声」なのだろうか。子どもたちは自信がなさそうだった（私も同じだ！）。

このお話しを議論した二つ目のクラスで、各人には片方の耳もとでささやく「天使」ともう片方の耳もとでささやく「悪魔」がいるのだ、とローラが提案した。リリーとエディーは神経生理学についてもっていた知識を動員して、葛藤する欲求がある場合、葛藤しあう違った信号が脳に伝わっているのだ、と提案した。二人が考えるには、一つの信号はアンナがお話しの中で語っているブラウニーの甘さを味わい、私がもう一つブラウニーを食べるようにせよ、と脳を誘う舌に由来するものである。もう一つは、食べ物で一杯になってそれを吐き上げるぞと警告しはじめた胃袋に由来するものである。子どもたちは神経生理学のお話しのほうが、天使と悪魔の話しより科学的だと思っているようだった。

アレックスは、自己にはいくつかの違った部分があるという考えよりも、脳に向かう違った思いがあるという考えに視線を据えた。「違った部分があるというより違った思いがあって、脳はどちらの思いをとるか決めなければならない」とアレックスは言った。

議論のこの時点で、何人かの子どもたちが二つ以上の競合する欲求がありうると提案した。この提案は常識的だと思われるが、理性と欲求との闘いという葛藤の伝統的な説明に対するたいへん奥の深い批判を含んでいる。二つまたはそれ以上のよいことがあってそのどちらもやりたいが、そのうち一つしかできないことに気づくことがある。また、二つまたはそれ以上の等しく悪いことがあってそのどちらもやりたいが、そのうち一つしかできないこともある。これらのいずれが起こる場合も、理性と欲求の、あるいは天使と悪魔の間の競合がどこに起こっているのか理解できない。二人の天使が衝突しているのかもしれないし、二人の悪魔かもしれない――あるいは三人、七人かもしれないし、その他の数かもしれない。たとえば、クリスマスに貯金を救世軍の募金鍋に入れるか、それとも幼い妹におもちゃを買ってあげるかの間で、私は引き裂かれるかもしれない。いずれを行うこともよいことであろうが、いずれか一つしかすることはできない。あるいは、弟が私の吹奏楽のコンサートをさぼったから、弟のピアノのリサイタルをはじめからさぼるべきか、それともリサイタルに行って弟をナーヴァスにさせ、いくつか音符を間違えさせるべきか、決めかねるかもしれない。いずれを行うことも悪いことであり、私はいずれもやりやりたいと思うだろうが、それらのいずれかしかできないことがわかっている。これらすべてのことから帰結することは、欲求の葛藤はよい衝動と悪い衝動との間の葛藤である必然性はない、ということである。

これらの子どもたちが引き付けられている欲求の葛藤のモデルは、このように、伝統的な

プラトンのお話よりもずっと柔軟である。心は脳であると考えて、違った信号が脳に伝わり、脳がその信号すべてに従って身体を動かすことはできないと悟れば、動機の葛藤にもっと多様性を認めることができる。おそらく実際に信号はしばしば二つ一組で伝わる。「それは甘い、だから食べよ！」と「気分が悪くなるぞ、それを食べるのをやめよ！」だが、原理的には信号は三つ一組、四つ一組であるかもしれない。そして、それが二つ一組で伝わるとしても、一方が賢い自己の代弁者であり、他方が貪欲な自己の代弁者であるとは限らないのである。

その二つの授業はおもしろくて刺激的だったが、もってきたお話しに私が込めようとした問いに子どもたちは本当には取り組んではくれなかった、という思いとともに私は教室を後にした。私は、自己の部分について語ることは責任逃れかどうか、という問題に行き着けばいいと思っていたのだ。私の一つの部分がブラウニーをもう一つ食べたいと思い、もう一つの部分がブラウニーを食べるのをやめたいと思う、ということによって、私は状況から消えてしまう。聖パウロは、聖書のローマ人への手紙（7:17）で言う。「それを行うのは私ではなく、私のうちに棲む罪である。」さて、私が食べすぎたり、自分の取り分以上のブラウニーをとったりしたとき、聖パウロ風に「それを行ったのは私ではなく、私のうちではたらく貪欲な欲求である」と言うことによって〔良心の〕検閲をかわそうとするかもしれない。

アーノルド・ロウベル（Arnold Lobel）は、クッキーを食べるのやめるべきだとわかっていてもやめることができないことをめぐる、楽しく奥深いお話しを書いた。「クッキー」というお話しは、『かえるくんとがまくん』（*Frog and Toad Together*）[2]というかえるとがまがえるのお話し集に収められている。ロウベルのお話しの中で、かえるはがまがえるに、必要なのは意志の力だと言う[3]。「意志の力って何？」とがまがえるはきく。「意志の力とは、本当にしたいことをしないようにがんばることだよ」とかえるは言う。お話しは展開して奥深い結末に至るのだが、それをここでは詳らかにしたくない。ただ、読者は意志の力の不足について責任があるのは誰なのか、という疑問を抱いてこの本を閉じることになる〔ことだけ明らかにしておこう〕。責任があるのは依存症的な欲求を制御できない自己の理性的な部分なのか？　それは正しいとは思えない。理性はただ、「もう一つクッキーを食べれば気分が悪くなるだろう」というような結論を引き出すだけだ。理性は決定を下すのではない。それでは責任があるのは欲求だろうか。それも正しいとは思われない。欲求を制御するには意志の力が必要である。欲求は責任の座ではない。すると、誰に責任があるのか？

その日ノースハンプトンの学校からの帰り道、あの二つのクラスの子どもたちは、やはり最終的には、責任の問題に取り組んだのだ、ということに気づいた。あの子たちは、問題は、我われが本当に部分をもっていて、ある部分はあることをしたいと思い、もう一つの部分は他のことをしたいと思かどうかではない、と判断したのだ。むしろ、脳つまり心に伝わる違った信号があるということが問題だということを、子どもたちは提案したのだ。「心が同意しない限り人は何もすることはない」と子どもたちの一人は述べた。心に本当に責任があるなら、私がそんなことをさせたのは私の貪欲な部分だと言うことによって、自分を放免することはできない。貪欲な部分は脳を誘惑するような信号を送るが、その貪欲な提案に基づいて行為

することに同意しない限り、何も起こらないのである。

人が理性と欲求との間の綱引きにおいて何をなすかについては、脳（または心に）責任があるとしたところで、意思の弱さという古典的な哲学の問題を解くことはできない（つまり、すべきではないとわかっていることを私が行っているのはいったいなぜか)。しかし、少なくとも「それを行ったのは私ではなく、私の欲求だ」というあまりにも安易な逃避は締め出されることになる。

以上述べてきたことを、哲学とシティズンシップについて少し述べて締め括ることにしたい。今日報告した二つの哲学的議論は道徳心理学－すべての人は心理学的なエゴイストであるかどうか、一人の人の中で生じる葛藤はその人の違った部分の葛藤として理解してよいかどうか、にかかわるものである。

民主主義国におけるよき市民は、性格と人間の動機について判断を下すことができなければならない。人間の動機と人間の性格をあまり考察したことのない市民は、哲学的、心理学的に洗練された人々に比べ政治家に操作されやすい。操作されやすい人々は、自分自身の利益に役立つように投票しない、まして社会全体の利益に役立つ投票をしないことは言うまでもない。子どもとともに哲学することが重要である一つの理由は、子どもたちのうちに反省的な心と批判的で独立した思考の技能を育てることである。子どもとともに哲学する理由は他にもあるが、子どもが反省的で批判的な心を育むのを援助するという目標は、いうまでもなく一つのきわめて重要な目標である。

注

1 ここではニュー・ジャージー州アッパー・モンクレアにある子どものための哲学推進研究所のマシュー・リップマンとその関係者によって開発された子どもとともに哲学する方法を使っている。

2 NewYork,Harper Collins,1979

3 *Ibid*. ,35.